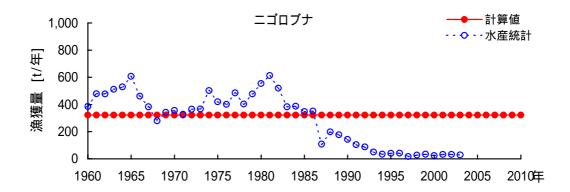
# .毎年5月1日(産卵盛期)一斉産卵させたモデル

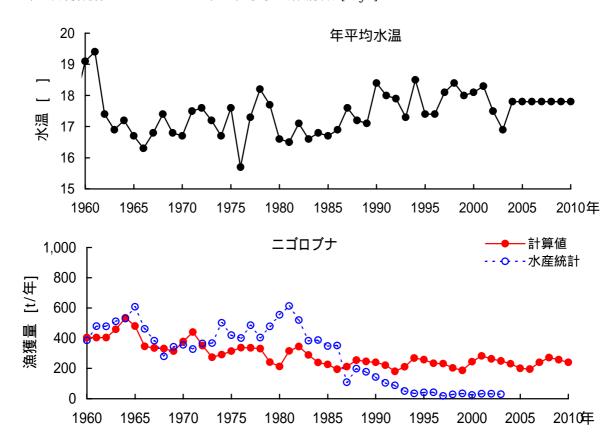
1992~2002年の平均的なパラメータをもとに、初期値(産卵量)を4·10<sup>10</sup>個体にして、計算開始年(1960年)の約400t/年に設定



1.水温 T[]

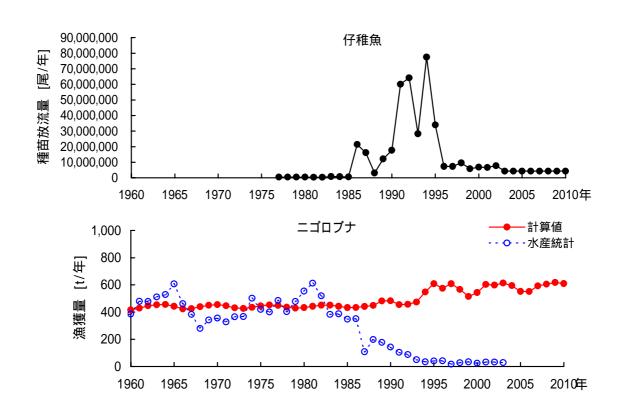
No.	発	育段階	パラメータ	関数型	備考
1)	0	卵	孵化日数	積算水温 120	
2)	1	仔魚	成長係数	$G_{1(T)} = G_{1,k} 1.05^{(T-17)}$	
5)	2	稚魚	成長係数	$G_{2(T)} = G_{2,k} 1.05^{(T-20)}$	
9)	3	未成魚	成長係数	$G_{3(T)} = G_{3,k} 1.1^{(T-20)}$	
9)	4	成魚	成長係数	$G_{4(T)} = G_{4,k} 1.1^{(T-20)}$	

Gi,k: 発育段階 i の 1992~2002 年の平均的な成長係数 [day-1]



## 2.種苗放流

No.	発	育段階	パラメータ	関数型	備考	
	0	呵				
	1	仔魚				
19)	2	稚魚	R	N <sub>2</sub> +R	栽培センター、滋賀水試等の種苗放流量を加算	
	3	未成魚				
	4	成魚				



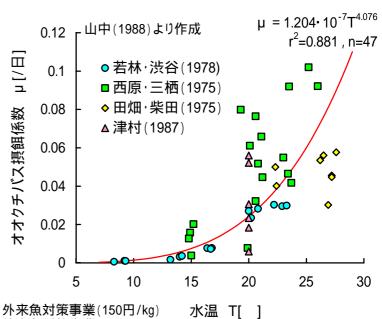
#### 3.捕食者(オオクチバス、ブルーギル)

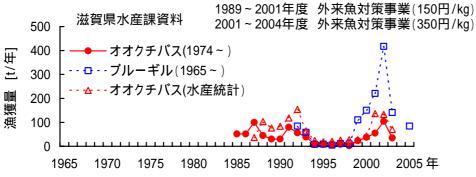
No.	発育段階 パラメー		パラメータ	関数型	備考
	0	卵			
	1	仔魚			
18)	2	稚魚		摂餌係数 μ と水温 ( 図参照 ) 被捕食数 Np を推定し減算 Np = ( μ P / W) , P = Y / E	P:バス・ギル資源量、Y:バス・ ギル漁獲量、E:漁獲率、 :ニゴ ロブナ選択係数、 :チューニン グ定数 <sup>注</sup>
	3	未成魚			
	4	成魚			

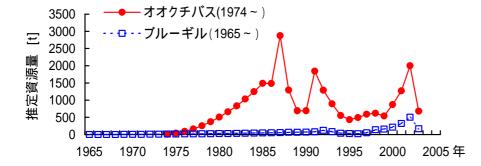
2002年の漁獲率(E)を1として、2002年度以降(350円/kg): E=1、外来魚対策事業(滋賀県)で1989~2001年度(150円/kg): E=1.2、それ以前 E=1.5とした

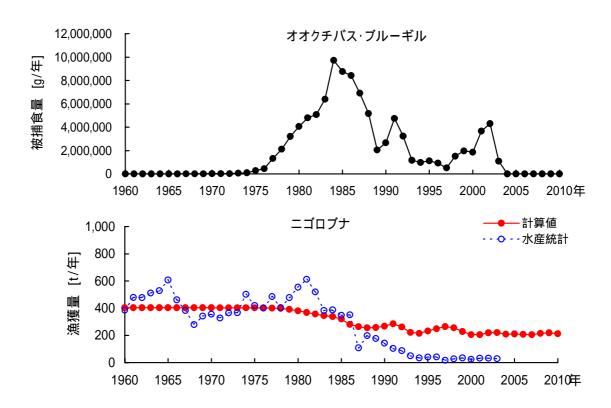
ブルーギルの µ はオオクチバスと同じとする

<sup>注</sup>:現在の水準でオオクチバス 2,000 t、ブルーギル 500t と推定(滋賀県)







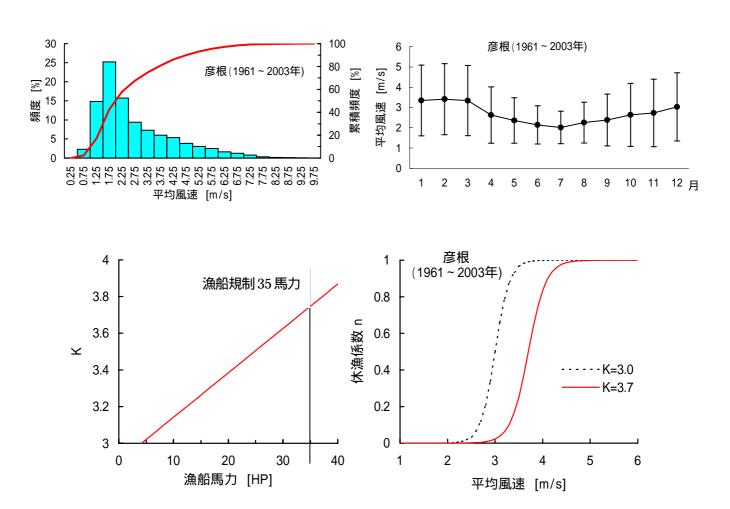


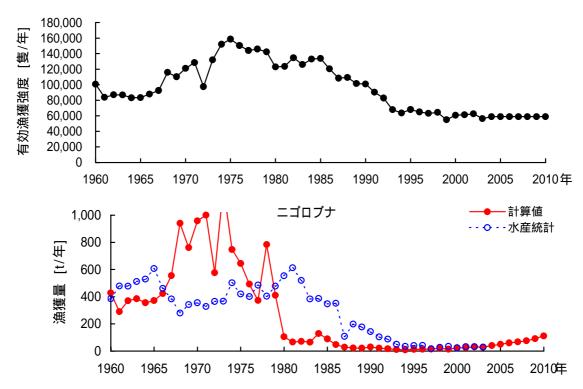
### 4.漁業

No.	発育段階		パラメータ	関数型	備考
	0	蚵			
	1	仔魚			
	2	稚魚			
	3	未成魚			
20)	4	成魚	漁獲係数	F = q f	f:有効漁獲強度
				f = X / A	A:漁場面積(内湖および琵琶湖の
				X = (1 - n) X'	水ヨシ群落面積 ) [m²]
				$n = 1 / (1 + \exp(20(1 - v/K)))$	X:有効漁獲努力数
				K = 2.9 + 0.0242HP	X':動力船の操業日数 [隻/日]
					v:平均風速 [m/s]
					HP:漁船馬力

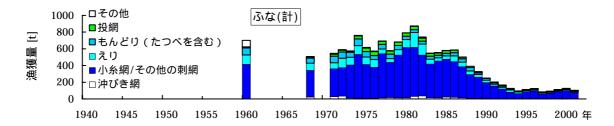
フナ類は小糸網の漁獲率が約80%

小糸網の漁具能率は 1960 年以降大きな変化がないと考えられるが、産卵初期 (春先)の操業に漁船馬力が に影響すると仮定

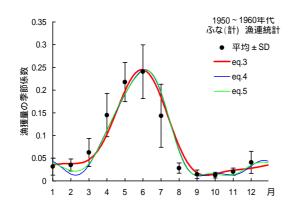


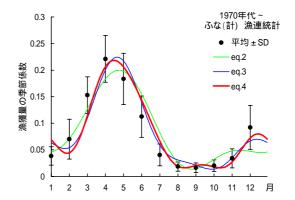


### (参考)



### (参考)





#### 5. 産卵・成育場面積および密度効果

No.	発	育段階	パラメータ	関数型	備考
	0	卵			
15)	1	仔魚	自然死亡係数	$M_1 = rM_{1,k}$	N':生息密度 [個体/m²]
16)				r = -0.0093N' + 1.23	A:冠水ヨシ群落面積(内湖+琵琶湖)[m²]
				N'=N/A	: チューニング定数
	2	稚魚	自然死亡係数	同上	仔魚の影響の 1/2 を考慮
	3	未成魚			
	4	成魚			

M<sub>i,k</sub>: 発育段階 i の 1992~2002 年の平均的な自然死亡係数 [day-1]

